

2021年3月31日(水)

老球の細道602号

3月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

会うは別れの始めなり、別れは出会いの始めなり。3月は別れの季節であるが、新型コロナの影響できちんと別れの儀式を終えただろうか。そして今年は東日本大震災10周年の節目。コロナと震災の思い出の毎日となった。改めて人生無常迅速、前向きに生きるのみ。

1・テレビから

◆「一生柔道が好きであってほしいと指導していく。そうすれば弱くても、柔の道を歩いて行ける」〈NHK ニュース：柔道金メダリスト・故古賀稔彦〉：負けの経験を背負った人でも、バスケットの面白さ、深さを知ることによって生涯バスケットになりうる。そんな指導がしたい。

◆「型がある人が型を破るから型破り、型がない人が破れば型無しよ」〈NHKBS：アナザーストーリー：唐十郎〉：個性を大切にする、型にはめないという風潮が重宝される昨今、世阿弥の「守破離」は、いつの時代でも、芸術でもスポーツでも大器晩成の原則は共通。

◆「私たちの幸せは、ファンの皆様が幸せに感じてくれることです」〈WBL 決勝戦優勝インタビュー：トヨタ・モンデール HC〉：日常が世界基準の日本女子バスケット。仕事の基準は、「好き」「皆を喜ばせる」「お金になる」。私のクリニックもそうありたい。

2・読書から

◆「勝者によって敗者は斬られる。いや斬る側が勝者であり、斬られる側が敗者となるのが政治の力学であり、事の是非とは関係がない」〈澤地久枝著『雪はよごれていた』日本放送出版協会〉：「2・26事件」を扱った名著。古今東西、トカゲのシッポ斬りが横行する。

◆「誰が出ようとそんなことは大した問題ではない。システムで試合をするんだ。チームとしての動きの原則に基づいて試合は運ばれるんだぞ。そう肝に銘じて試合をしてこい。そうすれば勝てる」〈ジョン・ファインスタイン著『瀬戸際に立たされて』日本文化出版〉：天才コーチ、ボビー・ナイトの言葉。最近チームのシステム、ルールのないチームが多すぎる。

3・新聞から

◆「『古希になったんだな』と思って字をよく見たら、古い希望と書いてある。『ああ、古いやつが希望を持つんだな』と。できれば元気な体で、仕事があればずっとやっていたい。だって他に能力がないですから」〈朝日：輝く人：綾小路きみまろ〉：コーチを志して“あれから40数年”、今も情熱が冷めないのは幸運である。「人は希望と共に若く、失望と共に老いる」と言われるが、これからどんな希望を持って生きていこうか、公希君に聞いてみよう。

◆「先のことは考えません。その通りになることは何もないから。重要なのは、いまを全力で生きること。将来どうなりたいかではなく、今何をするか。文化と同じで人生も、毎日の積み重ねが最終的に人が生きた集大成として“人生”と呼ばれる」〈朝日：フロントランナー：中田英寿〉：サッカーから日本酒界へ見事なセカンドキャリアを成し遂げた。一芸に秀でたる人間は多芸に秀でる。三重の銘酒“而今”（今がすべて）通りに生きているのが凄い。